

# 教職大学院

## Newsletter

# No. 81

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2015. 2. 26

## 実践し省察するコミュニティ

### 実践研究 福井ラウンドテーブル

### 2016 Spring Sessions 特集号

# 実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:  
Spring Sessions 2016  
for Reflective Practice  
and Organizational Learning  
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

2016 Spring Sessions

2/26(fri) 17:30-18:40

2/27(sat) 9:40-17:40

(session0 9:40-11:20)

2/28(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V (教育系1号館)  
/AOSSA

探究する学びを実現する教師  
教師を支える教職大学院  
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク

## 2016.2.26-28

教師教育改革コラボレーション/福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻

共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム

後援：福井県教育委員会

## 内容

ラウンドテーブルによるこそ (2)

実践し省察するコミュニティ  
実践研究 福井ラウンドテーブル  
2015 Summer Sessions 内容と構成 (3)

ラウンドテーブル  
実践し省察するコミュニティを結び支える (8)

分散型コミュニティへの挑戦  
ラウンドテーブルの広がり と 深化 (10)

ラウンドテーブルの歩み (11)

教職大学院 Newsletter No.1 より (12)  
日本の教師教育改革のための福井会議2008/  
学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008

教職大学院 Newsletter No.71より (17)  
実践研究 福井ラウンドテーブル  
2015 Spring Sessions

『2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書  
ラウンドテーブルの広がり と 深化』の発行 (28)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2016年2月の開催をもって30回を迎えます。今回のラウンドテーブルは、この節目にふさわしく、様々な角度からの実践と省察に開かれた多くのコミュニティに満ちています。プロセスコンサルテーションを鍵概念とした初日のプレセッションに始まり、学校（Zone A）・教師（Zone B）・コミュニティ（Zone C）・授業（Zone D）の各領域に分かれたセッションを展開する2日目、そして過去最大規模となる最終日のクロスセッションでの語り合い・聞き合いはもちろんのこと、オックスフォード大学ハリー・ダニエルズ教授による講演や、OECD日本イノベーションスクールのセッション、さらには児童生徒たちによるポスター発表や交流など、今回のラウンドテーブルはこれまで以上に本当に多くの出会いに溢れています。事実、参加者は本文を執筆している時点ですでに過去最大規模の700名を越える勢いです。あまりの規模の大きさに少しばかりの不安も抱いていますが、大きな教育の変わり目の中でこの3日間のラウンドテーブルが一つのコミュニティとなり、参加者の皆さんと実践し省察することができること、スタッフ一同大きな期待を持っています。

## ラウンドテーブルによるこそ

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長 柳澤 昌一

実践研究福井ラウンドテーブル2016 spring sessionsに参加いただき、ありがとうございます。

15年の年、30回の積み重ねの中でつねに展開し続けているラウンドテーブルですが、大切にしていること、願っていることは変わりません。実践の長い歩み、そのプロセスをじっくり語り、聞き合い、互いに問い深める時間と空間を生み出したいということです。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

それぞれの分野では、固有の技術や言葉や型を彫琢していますが、実践のプロセス、それを通じた実践者としての学習と成長の道筋に関心をもって聞けば、そこには分野を超えて共有できる、されるべき実践の中での知とその成長のストーリーが紡がれていることに気がきます。そして、そこで捉え返され共有される長い実践展開のストーリーが、次の自他の実践の展開を支えるフレームとして生きて働いていくことを実感してきています。その時ラウンドテーブルは、一過性の集会ではなく、それぞれの実践のコミュニティでの営みとその意味を問い返し、その持続と発展を支える省察的なコミュニケーションのためのメタコミュニティとして働き続けていることとなります。

こうした省察的なコミュニケーションとそのコミュニティを通して、地域を越え分野を超え、しかもそれぞれの分野の実践の長い展開に根ざした協働探究の可能性がひらかれるならば、それぞれの実践の蓄積と多様性を活かしたパブリックなコミュニケーションを編んでいく可能性につながっていくのではないかと。それは公教育(Public Learning)とその理念への問いと、それぞれの持ち場での日々の実践との見失われた環を問い直す、編み直すプロセスにもつながっています。その問いは、教育学部・教職大学院の存在する根本的な理由に根ざしています。

プレセッションから多様なサイクルの積み重ねを通して、互いの実践の展開を跡づけ、意味を共有し、次の展開へと視界をひらいていく3日間にできたらと思います。

語り手以上に聴き手の力が問われるラウンドテーブルです。今回もまたセッションを通してプロセスを追う力を培っていきたいと思っています。どうかよろしくお願ひ致します。

# 実践研究 福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions

## 2/26(fri)

Pre-session 17:30-18:40

教職大学院におけるプロセスコンサルテーション

## 2/27 (sat) 9:40-17:40

session0 9:40-11:20 『学び舎』として学校をリ・デザインする

Keynote Speech

ハリー・ダニエルズ・無藤隆・岸野麻衣・杉山晋平

Students' Poster Session 11:30-12:30 子どもたちが語る「私たちの学校・学び・未来」

orientation 13:00-13:10 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

- A 学校：子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ 校種を超えて教育を協働する
- B 教師：教職生活全体を通じた教員の資質・能力の育成 育成指標は教員研修を変えられるのか
- C コミュニティ：①学び合うコミュニティを培う：若い世代と地域を結ぶ(会場は福井駅前 AOSSA)  
②地域と学校はいかに学び合うのか：大人も子どもも育ち合うコミュニティへ
- D 授業研究：教師の資本を授業研究によっていかに培うのか：子どもと教師の学びを支えるために

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る symposiums

session III 16:00-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める forums

## 2/28(sun) 8:20-14:00 SessionIV round table cross sessions

### 実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。



実践し  
省察する  
コミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions  
2016.2.26(fri) - 28(sun)

# Bunkyo

【文京キャンパス】  
Campus

総合研究棟V  
(教育系1号館)

共用講義棟



創造力、実践力。 国立大学法人 福井大学 UNIVERSITY OF FUKUI

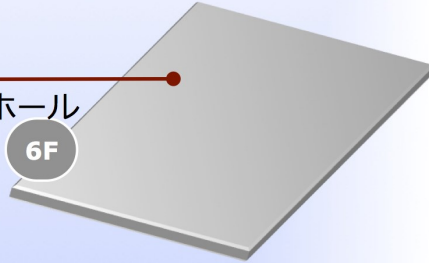


総合研究棟V  
(教育系1号館)

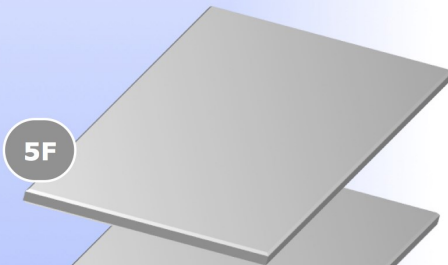
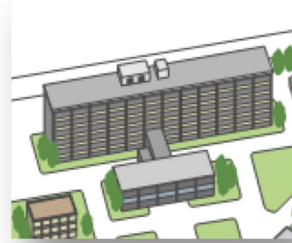
実践研究 福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions  
Session 0-3 (Zone A/B/C2/D)

6F

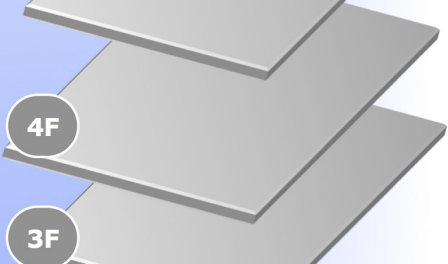
コラボレーションホール



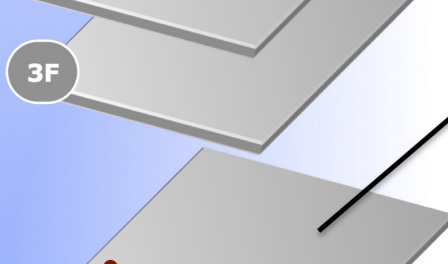
6F



5F



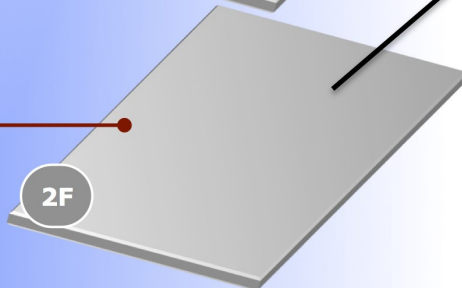
4F



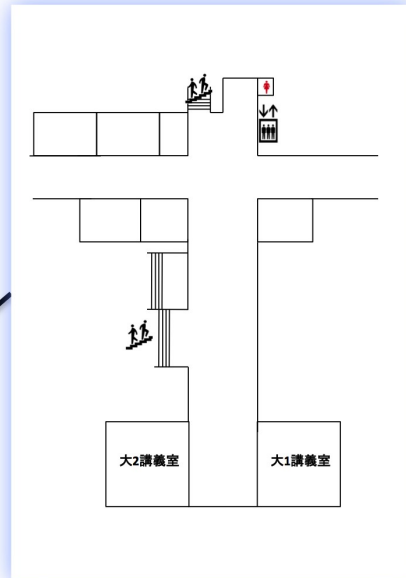
3F

2F

大1講義室  
大2講義室  
203～207

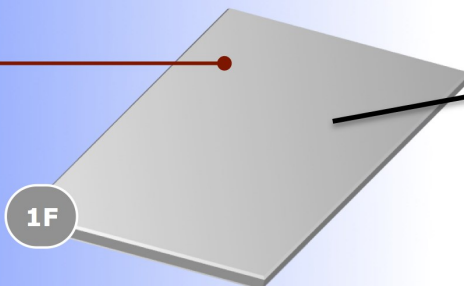


2F

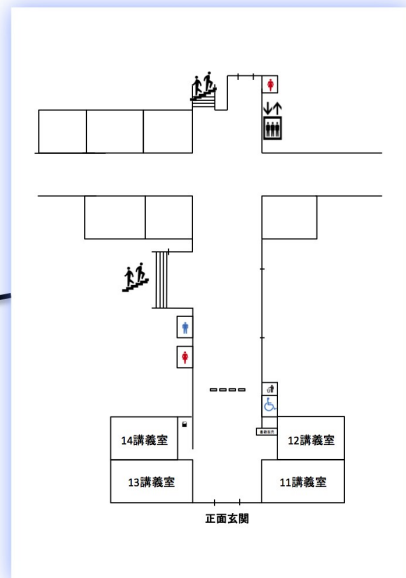


1F

受付  
11講義室  
12講義室  
13講義室  
14講義室  
101～102

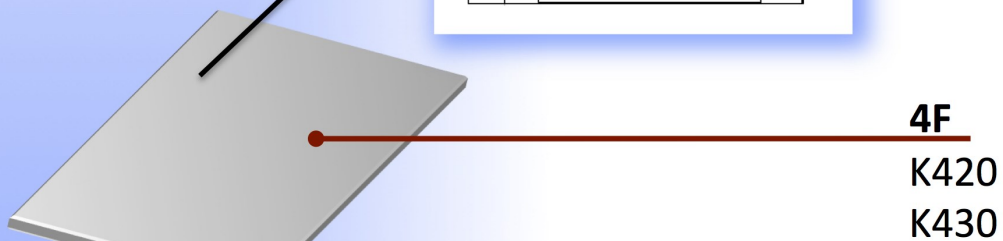
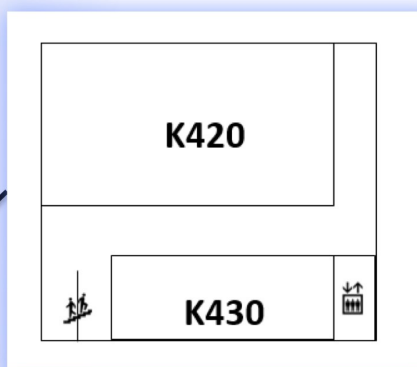


1F

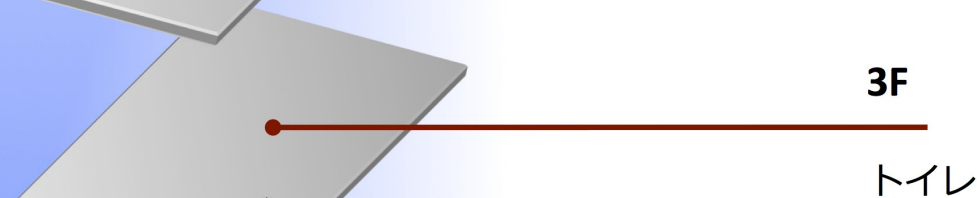


共用  
講義棟

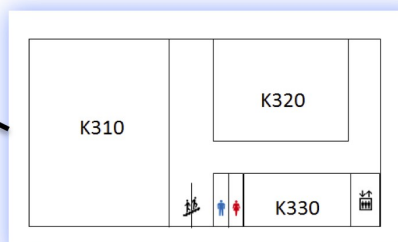
実践研究 福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions  
Session 2-3 (Zone C2)



**4F**  
K420  
K430



**3F**  
トイレ



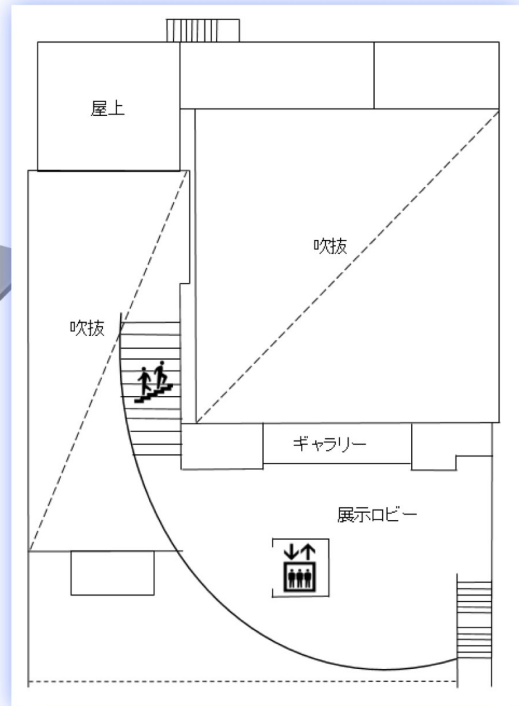
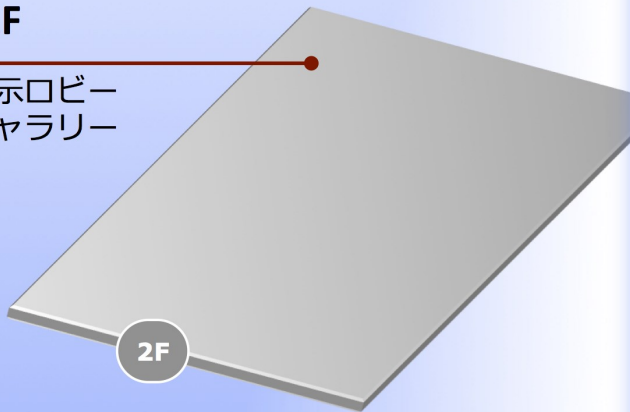
# アカデミー ホール

実践研究 福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions  
ISN/Student Poster Session/懇親会



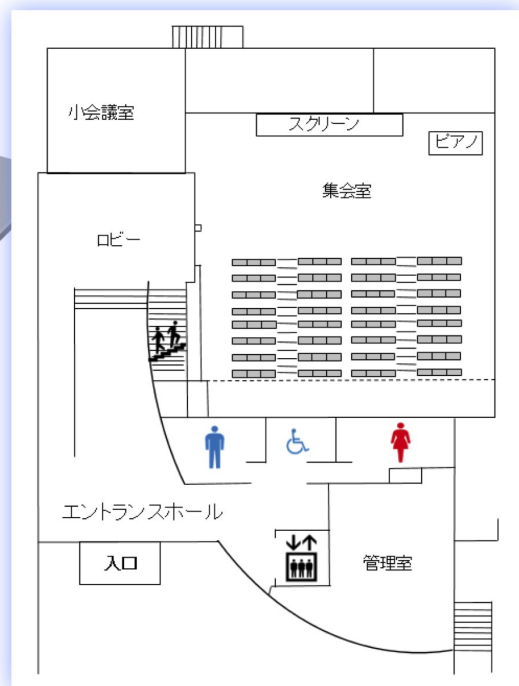
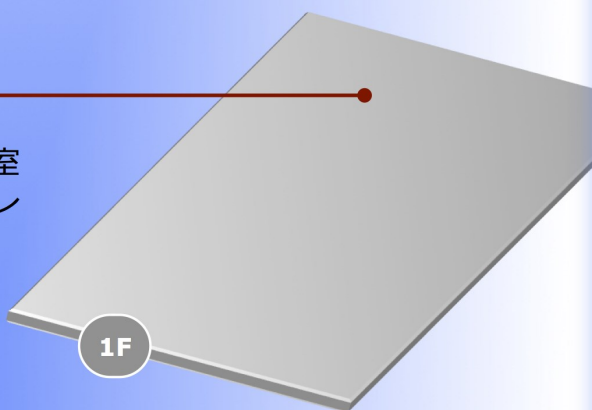
**2F**

展示ロビー  
ギャラリー



**1F**

受付  
集会室  
トイレ





# Students' Poster Session

## 「子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来』」

本ポスターセッションでは、21世紀半ばの未来を創っていく小学生・中学生が、今、この時の教育の中で何を学び、いかに学び、そして未来を切り拓いていくための力と心をいかに培っているのかを、「私たちの学校・学び・未来」というテーマに基づいて自らの言葉で表現します。

1発表15分と短い時間になりますが、子どもたちのポスターを介した表現をぜひ体感ください。

\*ポスター発表を参観されるみなさまには、子どもたちの挑戦を温かく受けとめていただき、子どもたちの学びを支えるためのコメントや質問をお願いいたします。差し出がましいことですが、子どもたちに難しい質問をしたり、持論を述べたりするなどはお控えください。

### 平成 28 年 2 月 27 日（土） 11:30-12:30

#### 発表① 11:30-11:45

福井大学教育地域科学部附属小学校・6年生「夢プロジェクト～コミュニケーション～」  
福井大学教育地域科学部附属小学校・6年生「夢プロジェクト～命の大切さ～」  
福井大学教育地域科学部附属中学校・2年生学P「附中の伝統『学P』」  
坂井市立春江小学校・4年生① 福井市越廼小学校・5年生① 福井市美山中学校 など

#### 発表② 11:45-12:00

福井大学教育地域科学部附属小学校・6年生「夢プロジェクト～体づくり～」  
福井大学教育地域科学部附属小学校・6年生「夢プロジェクト～やり遂げる～」  
福井市美山中学校 坂井市立春江小学校 4年生②  
坂井市立丸岡南中学校「学び合う学校文化 教科センター方式とスクエア制・地域と共に生きる」  
福井大学教育地域科学部附属中学校・1年生学P「学Pのすゝめ～自分たちでつくりあげる学年プロジェクト～」 など

#### 発表③ 12:00-12:15

福井大学教育地域科学部附属小学校・6年生「夢プロジェクト～考える～」  
福井大学教育地域科学部附属小学校・6年生「夢プロジェクト～人から学ぶ～」  
福井大学教育地域科学部附属小学校・6年生「夢プロジェクト～表現する①～」  
福井市至民中学校・2年生「至民を語る～3つの視点～」  
坂井市立春江小学校 4年生③ 福井市越廼小学校・5年生②  
福井大学教育地域科学部附属中学校・音ドラ「創作音楽ドラマ～119人で創る“和”～」など

#### 発表④ 12:15-12:30

福井大学教育地域科学部附属小学校・6年生「夢プロジェクト～表現する②～」  
福井大学教育地域科学部附属中学校・音楽委員会「受け継いで～私たちの音楽文化～」  
福井市明道中学校  
福井大学教育地域科学部附属中学校・理科「私たちの新・解体新書～リトルティーチャーたちが作る理科授業」  
福井大学教育地域科学部附属小学校・6年生「夢プロジェクト～力を合わせる～」 など

## 福井大学文京キャンパス アカデミーホール

実践し  
省察する  
コミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions

懇親会

# Bunkyo Campus

【文京キャンパス】

総合研究棟  
(教育系1号館)

共用講義棟



アカデミー  
ホール

創造力、実践力。  国立大学法人  
福井大学  
UNIVERSITY OF FUKUI

懇親会にも「来ね！」

とき 27日(土) 18:00~19:30

ところ アカデミーホール

会費 2000円

事前申し込みがなくても受け付けます。

# Zone A 学校

## 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

### ―校種を超えて教育を協働する―

いま、教育をめぐる現状は目まぐるしく変貌しています。新しい学習指導要領では、急速なグローバル化と情報化、そして超高齢化する2030年の社会を見据えた教育のあり方が議論され、アクティブラーニングを始めとした新たな方法の必要性が叫ばれています。たしかに、これからの社会で生きる子どもたちに対して、私たちのこれまでの価値観や経験をそのまま教えていくことができないのは明らかです。しかし正直なところ、これからの学校教育において私たちは何をどうすれば良いのか、雲をつかむような手応えの中で焦りと不安ばかりが募るのも事実ではないでしょうか。

私たちの誰も経験したことがない教育を求められる今の学校現場では、教師一人の力で全てに対応することに限界があります。であれば、他者と一緒に考えていくしかありません。これまでZone Aが「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマとしてきた理由は、まさにここに 있습니다。そして、継続したセッションの積み重ねを経て、教師同士が語り合い、聴き合い、ビジョンを共有して実践する、協働の重要性が浮かび上がってきました。不透明な社会を生きる子どもたちを支える教師にとって、言わば「協働する教育」こそが、その根幹をなすあり方ではないかということが、おぼろげに見えてきたわけです。

一方で、これまでのセッションでは、同じ学校内の教師コミュニティに着目するあまり、協働を横のつながりとして限られた時間軸の中でのみ捉えがちでした。そのため、校種を超えた、より広い時間軸の中で協働を捉える視点はこれまで欠けていたように思います。しかしながら、2030年の社会に生きる子どもたちへの学びを考えていく上では、子どもたちの発達をより広い枠組みから考え、言わば縦のつながりから教師コミュニティの協働を検討していくことは必要不可欠です。将来を見据えた時、私たち教師は今どういう市民を育てているのか、そうした子どもたちの長期的なビジョンを教師コミュニティで共有することが求められるからです。

そこで、今回のラウンドテーブルでは「校種を超えて教育を協働する」というサブテーマを掲げ、これからの日本社会を生きる子どもたちを育てていく上で、校種間の協働によって何ができるのかを話し合っていきたいと考えています。昨今の教育改革においては、校種間のつながりは大学進学を目的としたものとして、また、協働というキーワードは生徒同士学びを意味するものとして、それぞれ捉えられてきたように思います。しかし、校種の違いを超えて教育を考えていくことは、狭義の連携や協働を超えた実践的意義を、2030年を見据えた教育のあり方を、そして焦りと不安の中にいる私たち教師への一つの指針を、教師コミュニティにもたらしてくれるのではないかと期待を私たちは抱いています。ラウンドテーブルを通して、「校種を超えて教育を協働する」この可能性について皆さんと深めていくことができればと考えています。

**Orientation 13:00-13:10 総合研究棟V（教育系1号館）6階コラボレーションホール**

**Session I 13:10-14:10 poster session 総合研究棟V（教育系1号館）1・2階ホール**

福井県内外の保育所・幼稚園・小学校・中学校・高校・特別支援学校等から、「教育を協働する」実践についてポスター報告が行われます。ポスター報告にもとづき、各校及び参加者で互いの実践を交流します。

福井県立高志高等学校 福井県幼児教育支援センター  
奈良女子大学附属中等学校 静岡県富士市立高等学校

**Session II 14:20-15:50 symposium 総合研究棟V（教育系1号館）6階コラボレーションホール**

〈シンポジスト〉 和歌山県立桐蔭中学校・桐蔭高等学校 校長 岸田 正幸 氏  
長崎大学教育学部附属中学校 研究主任 鶴田 浩一 氏  
〈コメンテーター〉 白梅学園大学 教授 無藤 隆 氏  
〈コーディネーター〉 福井大学教職大学院 特命助教 綾城初穂

「校種を超えた教育を協働する」というテーマについて、それぞれの実践やビジョンを語っていただきます。さらにコメンテーターを通して、参加の皆さんとともに実践の意義について考えていきます。（シンポジスト・コメンテーターの発表時間は約20分を予定）

**Session III 16:00-17:40 forum 総合研究棟V（教育系1号館）6階コラボレーションホール**

先の2つのsessionを受け、参加者が小グループに分かれ、それぞれの立場や背景を基盤として議論し、共有していきます。それぞれの参加者が、校種を超えたコミュニティや協働について日々、感じていることや悩んでいることについて、本音を交えてじっくりと語れる場にしたいと考えています。



# Zone B 教師

## 21世紀の教師教育をイノベーションする ：教職生活全体を通じた教員の資質・能力の育成 －育成指標は教員研修を変えられるのか－

Zone Bでは、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、“21世紀の教師教育をイノベーションする”をテーマとしています。

昨年12月に中央教育審議会から出された答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」では、これからの時代の教員に求められる力として、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力などが挙げられています。そしてこのキャリアステージに応じた学びや成長を支えていくため、教員の養成・研修を計画・実施する際の基軸となる“育成指標”を教育委員会と教職大学院を含む大学等が協働して作成することや、教育委員会と大学等が相互に議論し、養成や研修の内容を調整するための制度として「教員育成協議会」（仮称）を創設することなどが提言されています。

また、教職大学院は、独立行政法人教員研修センターとも連携し、大学と教育委員会・学校との連携・協働のハブとなり、大学全体の教員養成の抜本的な強化や現職教員の研修への参画を図ること、独立行政法人教員研修センターは、教員の研修の充実のため、これまで以上に積極的に役割を果たしていく必要があることなども述べられています。

そこで、今回のZone Bでは、「教職生活全体を通じた教員の資質・能力の育成－育成指標は教員研修を変えられるのか」と題し、学校、教育委員会や教育センター、教員研修センター、教職大学院等が教員の育成ビジョンを共有し、連携・協働しながら、教員育成指標、教員育成協議会（仮称）、教員研修計画等を構築する中で、高度専門職業人として学び合い、高め合う教員を育成・支援するため、それぞれがどのような役割を担い果たしていくべきなのか、参会者の皆様方と共に以下のセッションを進めながら考えていきたいと思ひます。

**Orientation 13:00-13:10 総合研究棟V（教育系1号館）2階 大2講義室**

**Session I 13:10-14:10 poster session 総合研究棟V（教育系1号館）1・2階ホール**

横浜市教育委員会 独立行政法人教員研修センター  
京都府総合教育センター 福井大学

**Session II 14:20-15:50 symposium 総合研究棟V（教育系1号館）2階 大2講義室**

〈シンポジスト〉 文部科学省高等教育局長 常盤 豊 氏  
独立行政法人教員研修センター理事長 高岡 信也 氏  
横浜市立浦島小学校長 平本 正則 氏  
福井県敦賀市教育長 上野 弘 氏  
〈コーディネーター〉 福井大学教職大学院教授 松木 健一

**Session III 16:00-17:40 forum 総合研究棟V（教育系1号館）2階 大2講義室**

203・204・205・206講義室

Session I, IIを受け、小グループに分かれて参会者の皆様方と議論を進めます。

# Zone C コミュニティ

## 学び合うコミュニティを培う

これまでZone Cでは、各地で取り組まれている長期に渡る実践の歩みとその展開を、地域・世代・領域を超え共有し検討し続けています。そして、ここ数年はコミュニティの発展における「持続性」をめぐる問題に焦点を当て、互いの実践から学び合っています。現在、私たちが地域や職場で出会う課題はある一つのアプローチで解決しえないものへとより複雑化・高度化しています。そのため、地域の発展を支える自治や学習においてもその持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われていると言えます。この問題意識と視点を引き継ぎながら、今回Zone Cは、C1「若者と地域」・C2「地域と学校」という互いに重なり合う2つのテーマを設定いたしました。

人口減少・移動の更なる進行によって、地域社会の存立そのものが危ぶまれるとともに、「地方創生」が重点課題としてクローズ・アップされてきました。そのような中、C1では、あらためて新しい世代の主体的な実践や地域活動に光をあてながら、その持続的な展開を支えるコーディネートの可能性と課題を考えていきたいと思ひます。

また、昨年12月には「学校と地域の連携・協働」にかかわる課題整理と今後の包括的な方向性を提起する中央教育審議会答申が出されましたが、子どもたちの学びや成長を支えることで学校と地域がともに学び合うという実践は、各地で着実に積み重ねられてきています。C2では、そのような実践の長い歩みや新しい試みを交流し、その価値を互いにじっくりとふりかえりながら、子どもも大人も育ち合うコミュニティのこれからを考えていきたいと思ひます。

### C1 持続可能なコミュニティをコーディネートする -若い世代と地域を結ぶ-

C1は、福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、JR福井駅東口前のAOSSAが会場です。Session I ではフロアをまたぐ空間的な拡がりのなかにポスターを配置し実践交流を行います。Session II では、「持続可能なコミュニティをコーディネートする-若い世代と地域を結ぶ-」と題しシンポジウムを行います。若い世代が主体的に活動を進め地域に参画していることの意味を確認しながら、新しい世代の活動をどのように支えていけるのか、また、それをどのようにコーディネートしていけるのかを各地の取り組み事例をもとに考えていきます。Session III では、シンポジウムの問題提起を受け、6人程度の小グループを組み互いの取り組みを交流・共有していくクロスセッションを行います。多くの皆様のご参加・ご来場を心よりお待ちしております。



**Orientation 13:00-13:10** AOSSA 6階レクA・B

**Session I 13:10-14:10 poster session** AOSSA 4階展示スペース

福井市中央公民館 福井市殿下公民館 福井市清水東公民館  
ふくい市民国際交流協会 越前市王子保公民館 池田町立公民館  
越前市国高公民館 福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」  
福井大学探求ネットワーク

**Session II 14:20-15:50 symposium** AOSSA 6階レクA・B

〈シンポジスト〉 倉持 伸江 氏 (東京学芸大学)  
山田絵美子 氏 (福井県連合青年団)  
〈コーディネーター〉 吉岡 努 (福井市教育委員会生涯学習室)  
半原 芳子 (福井大学)

**Session III 16:00-17:40 forum** AOSSA 6階レクA・B

## C2 地域と学校はいかに学び合うのか –大人も子どもも育ち合うコミュニティへ–

C2では地域と学校の関わりについて考えます。たとえば、地域に暮らす大人たちや子どもたちが持つさまざまな要求に対して、学校を担う教職員たちはどのように応じますか。あるいは、教職員たちは地域の子ども・大人に対する責任をどのように果たしますか。このような相互関係をひとまず想定したうえで、学校と地域の関わりをとらえ直そうとしている活動や、地域に暮らす大人たちと子どもたちとの結びつきを編み直す取り組みを共有します。

そして地域と学校が学び合うとはいかなる営みでしょうか。地域と学校に生きるすべての大人も子どもも育ち合う関係性はどのようにつくられるのでしょうか。このような問いにも立ち返りつつ、過去と未来の世代に対する責任を果たす地域と学校のあり様や、子どもと大人が学び合い育ち合う意味について、すべての参加者とともに考えましょう。

**Orientation 13:00-13:10** 総合研究棟V（教育系1号館）1階 13講義室

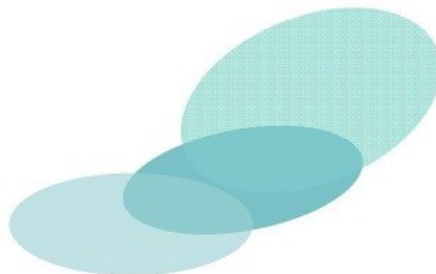
**Session I 13:10-14:10 poster session** 総合研究棟V（教育系1号館）1・2階ホール

福井市足羽公民館 福井市河合公民館 福井市清明公民館  
 福井市越廼公民館 越前市花筐公民館 勝山市荒土公民館  
 ふくい担い手プロジェクト 福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」  
 福井大学探求ネットワーク

**Session II 14:20-15:50 symposium** 共用講義棟4階 K420

〈シンポジスト〉 平野 淳也 氏（市立札幌大通高等学校）  
 重森 正雄 氏（安居の里を守る会）  
 〈コーディネーター〉 富永 良史 （福井大学）

**Session III 16:00-17:40 forum** 共用講義棟4階 K420





# Zone D 授業

## 教師の資本を授業研究によっていかに培うのか

—子どもと教師の学びを支えるために—

教師が専門職として生涯にわたって学び続け、成長し続け、新しい時代の授業づくりへの意欲を高め維持していくために、そして、未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えるために、日本独自の学校文化・教師文化である授業研究に大きな期待が寄せられています。しかし、ただ授業研究を実施すれば教師の指導力や授業づくりへの意欲が向上するわけでもなく、また、子どもたちの学力や生活力が向上するわけでもありません。何のために授業研究を実施するのか、いかなる授業研究を実施するのか、どのように授業研究を実施するのか、私たちはこれらの問いを常にもちながら、確かな戦略をもって授業研究を実施することが必要になります。

そこでZone Dでは、「専門職の資本」※という考え方を提案させていただいた上で、「教師の資本を授業研究によっていかに培うのか」というテーマで各Sessionを進めていきます。未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えている実践者や研究者の方々、「専門職の資本」を磨きはじめた若い実践者の方々にご参会いただければと思います。

※「専門職の資本」は人的資本、社会関係資本、意思決定資本の3つからなり、これらは、教師が専門職として生涯にわたって学び続け、成長し続けていくために投資できる（磨いていける）ものです。Zone Dでは、授業研究の力を「専門職の資本」へ投資するという観点から、参会者の皆様と一緒に考えていきたいと思っています。

**Orientation 13:00-13:10 総合研究棟V（教育系1号館）2階 大1講義室**

**Session I 13:10-14:10 poster session 総合研究棟V（教育系1号館）1・2階ホール**

東京都板橋区立赤塚第二中学校 福井県立若狭高等学校  
福井大学教育地域科学部附属中学校  
福井大学大学院教育学研究科教科教育専攻（美術）  
長崎県波佐見中学校 長野県岡谷市立岡谷小学校

**Session II 14:20-15:50 symposium 総合研究棟V（教育系1号館）2階 大1講義室**

### 「子どもと教師の学びを支える福井の授業研究」

〈シンポジスト〉 福井市至民中学校教諭 竹林 史恵 氏  
福井市中学校社会科授業研究会 森上 愛一郎 氏・松原 義之 氏  
福井県教育庁義務教育課主任 船田 次郎 氏  
坂井市立丸岡南中学校教諭 牧野 健次郎 氏  
小浜市立雲浜小学校教諭 藤野 亮 氏  
〈コメンテーター〉 東京大学大学院教授 秋田 喜代美 氏  
〈コーディネーター〉 福井大学教職大学院准教授 木村 優

**Session III 16:00-17:40 forum 総合研究棟V（教育系1号館）1階 11・12・13・14講義室**

#### A 学校における授業研究の多様性から学び合う

A-1 富山市立堀川小学校 福井大学教育地域科学部附属中学校  
A-2 信州大学教育学部附属松本中学校 おおい町立名田庄小学校

#### B 協働連携による授業研究

福井市中学校教育研究会・英語部会  
福井大学（美術）∞福井大学教育地域科学部附属特別支援学校

#### C 高校における授業研究の発展

埼玉県立新座高校 福井県立若狭高校

## ラウンドテーブル 実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

### 実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でもより長いライフストーリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にいるものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備しえていな

い。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

### 実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじ

めて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実には動かしがたい。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

#### 小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ①実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ②そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1報告60-100分)
- ③実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6名程度)
- ④グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社

会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)

- ⑤小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

#### パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う34の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして20名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの9年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

(柳沢 昌一『教職大学院ニューズレター』  
No. 11 , 2009. 3. 31)

### ラウンドテーブルの4重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。  
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。  
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice  
I II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。  
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ  
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners



## 分散型コミュニティへの挑戦 ラウンドテーブルの広がり と 深化



2001年3月、約20名の実践者や研究者が集まり、「教師の実践的力量形成をめざして」というテーマのもとで互いの教育実践と教育実践研究を交流し合う研究会が催された。ここで放たれた熱き議論が「実践研究福井ラウンドテーブル」の産声である。それから14年間もの間、「実践研究福井ラウンドテーブル」は福井県内外と国内外のコミュニティとの往還を絶え間なく積み重ねながら、21世紀の教育を支援するための実践コミュニティを真摯に耕し続けてきた。このたゆまぬ挑戦と努力の成果として、会を重ねるごとに「実践研究福井ラウンドテーブル」への参会者の増加が挙げられるとともに、参会者による実践報告の内容や質の多様化が挙げられる。「実践研究福井ラウンドテーブル」の創世記には少数の実践者の報告のみだったが、現在では研究者も自らの「実践」を報告し、さらに地域コミュニティの人々も自らの取組とその実践的意味を探究するために実践報告を行うようになった。この間、国際的な教育研究の前進を足がかりとしながら、教育の質保証と学びの転換を目指す多種多様な教育改革の施策や取組がなされてきた。その全ては、21世紀の知識社会に生きる子どもたちの幸せを保証するための挑戦であり、子どもたちの成長を支える全ての教育関係者の実践を支えるための挑戦である。「実践研究福井ラウンドテーブル」はこれらの挑戦を促し支えるための省察的機構としての実践コミュニティである。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの文字通り「実践の省察」を促し支えることをビジョンとする。このビジョンを基盤とした「実践研究福井ラウンドテーブル」には、日本全国や世界各地から多数の実践者や研究者が集まる。当然、彼ら／彼女らは「実践研究福井ラウンドテーブル」とは異なるコミュニティ、あるいは複数のコミュニティに属しており、それぞれのコミュニティ内でイノベーションを生み出す実践に挑戦している。つまり、「実践研究福井ラウンドテーブル」はローカル・コミュニティが集合する大きな、コミュニティの「坩堝（るつぼ）」なのである。もしも、このコミュニティの中で数多あるローカル・コミュニティが有機的に結びつき、そこ

でコミュニティ間の相互作用が加速化すると何が起きるのだろうか。それはおそらく新たな「知」の創発であり、新たな「かかわり」の生成であろう。これら新たな「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、現代社会を取り巻く困難や格差を突破するためのいくつかの「解（ソリューション）」が生み出される可能性が高まる。ただし、このダイナミクスを大きくし、このダイナミクスの質を深化させるためには「戦略」が必要になる。ただ指をくわえて待っているだけではダイナミクスやイノベーションは起こらないのである。

福井大学教職大学院はこれまでの「実践研究福井ラウンドテーブル」で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携し、「分散型コミュニティ」の設計に着手し始めた。日本全国そして世界各地にあるコミュニティの相互作用と化学反応を生み出すためには、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことが可能な「分散型コミュニティ」を設計することが肝要である。複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そこで互いの課題や問題を同定し、それらの解決策を考案し、共有可能な「知」を蓄積することが可能になる。「分散型コミュニティ」への挑戦とはつまり、「グローバル・コミュニティ」を築くための挑戦なのである。

2014年度には福井大学教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島で共有された理念とビジョンに基づく「ラウンドテーブル」が開かれた。この「ラウンドテーブル」の広がり各地で放たれた息吹は、日本の教育実践を支える新たな「省察的機構としての実践コミュニティ」の産声である。そしてこの実践コミュニティの足音はすでに様々な地域で共振している。この実践コミュニティは、おそらく日本の教育界ではじめて戦略的に組織化された「分散型コミュニティ」であり、今後数年あるいは十数年で「グローバル・コミュニティ」へと深化・進化することだろう。

(木村 優『2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書 ラウンドテーブルの広がり と 深化』2015. 3. 31)

## 実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2016.2

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンド・テーブル 教師の実践的力形成をめざして  
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる20人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった。）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察の実践を支える協働（第1回）  
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第1回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者20数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第2回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志  
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る。
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察の実践を生み出す 学び合う組織を編む）（第3回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第4回）  
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第5回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第6回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ:実践研究福井ラウンドテーブル2004（第7回）  
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）  
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る。
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2005（第8回 参加者100名超）  
国際シンポジウムAnn Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル2005（第9回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2006 フェニックス・プラザ（第10回）  
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル2006（第11回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫  
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2007（第12回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹  
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる。
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル2007（第13回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008（第14回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル2008（第15回）人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2009（第16回）稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル2009（第17回）5つの領域：専門職として学び合うコミュニティ（分野ごとのセッション始まる）
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2010（第18回参加者300名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル2010（第19回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011（第20回 参加者300名を超える。）門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル2011（第21回）松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル2012 spring sessions（第22回）(名称を変更する)
- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル2012 summer sessions（第23回）参加者450名を越える。  
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル2013 spring sessions（第24回）教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル2013 summer sessions（第25回）  
11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル2013winter sessions（明治大学）  
2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム（宇都宮大学）1.25 実践研究ラウンドテーブルin静岡（静岡大学）
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル2014 spring sessions（第26回）参加者550名を超える。
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル2014 summer sessions（第27回）  
11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡（静岡大学）  
11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル（明治大学）  
2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム, 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル2015 spring sessions（第28回）参加者 700名を超える。
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル2015 summer sessions（第29回）  
11.21 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡（静岡大学）  
11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル（明治大学）  
12.19 教育実践福島ラウンドテーブル, 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム,  
2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015



## 日本の教師教育改革のための福井会議2008／ 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008

教職大学院の出版を間近にした2008年3月1日と2日、「実践し省察するコミュニティ」をメインテーマとする公開研究会がひらかれました。教師教育のあり方、そして学校での協働研究の展開を、実践を通して探究するこの公開研究会は教職大学院の一年間の実践・省察・研究の要でもあります。この会に全国から、大学教員や院生、教育委員会や学校の先生方など、両日合わせて延べ300名近くが参加しました。Newsletter No.1個のでは、この二日間を通して聴き取ったこと考えたことを共有していく特集が組まれました。

### 私にとってのラウンドテーブル2008

岸野 麻衣 (福井大学)

3月1～2日の2日間に渡って開催された「日本の教師教育改革のための福井会議2008／学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008」を振り返って、それぞれのセッションで私が個人的に印象に残ったこと、考えたことを述べたい。

1日目は、教職大学院の設置に向けてこれまで準備を進めてきた過程を見つめ直し、今後の課題について考える機会となった。前半のシンポジウムでは、新田報告において法学等の他領域の専門職大学院の現状が述べられ、設置後の評価によって大学院の存続すら揺るがされるという提言がなされ、今後の行く末の厳しさを身に沁みて感じた。しかし続く松木報告では福井大学の教職大学院の構想が述べられ、最後に「大学の生き残りを考えて行動するのではなく日本の教育をこそ考えるべきである」と提言された。私にとってはこの言葉が非常に印象に残り、厳しい現実の中であっても、目の前の利害にとどまらず教育そのものを考え社会全体を見通した行動が求められていることを改めて感じさせられた。

後半のワークショップでは、「教職大学院スタッフの力量形成」と題して、これまで準備を進めてきた過程で何を学び、何を課題と考えるか、グループに分かれて議論しあった。私自身も福井大学での取り組みを報告し、この1年を振り返る機会となった。福井大学のスタッフは私を含めて今年度着任した教員が多かったことも奏功してか、具体的なカリキュラムなどは全員でアイデアを出し合い、相互作用によって創り出してきた。その過程は率直にいうと「とにかく楽しかった」のだが、1年を振り返り報告する中で、その楽しさの意味がわかってきた。教育背景も職業経歴も異なる多様な視点で意見を交し合う中では、「これでいいのか?」という葛藤が生じることもあったが、垣根を越えてお互いを理解しあい尊重しあいながら新たなカリキュラムや教育方法を考えるうちに、自分自身の枠組みが組みかえられていく面白さが生じていたの

だ。スタッフの間に、学びあいながら協働するコミュニティが生成されつつあると感じ、今後もさらに維持、発展させていくことが課題であると感じるセッションだった。

2日目は、子どもと関わる教師のありようという教育の本質を考えさせられる機会となった。私の参加したグループは、小学校の総合的な学習の実践報告と視覚障害児への長期にわたる援助の実践報告という一見すると異質な報告がなされた。司会の身としては議論がかみ合わなかったらどうしよう…と実は一抹の不安を抱えながら始めたのだが、力量のある参加者に恵まれ、大変深い議論がなされた。両方の実践に共通することとして特に印象に残っているのは、実践の裏側にある厚みである。一見子ども主体に楽しく活動しているように見えて、その裏側には、同僚と共に厳しく何度も作り直してきた指導案があり、子どもと共に時に苦心しながら歩んできた歴史がある。議論の中で「子どもに癒される」という言葉が発せられたのだが、それは単に慰められるという意味ではなく、生き生きと学ぶ子どもを目にする喜びであり、共に学ぶ「同志」のような関係で教師自身の存在が認められる喜びでもあるのではないかと思った。

最後に、今回はラウンドテーブルの運営に携わったことで学んだことも多かった。学会等は研究者の集まり、学校の公開研究会等は実践者の集まりと二分されがちだが、ラウンドテーブルは大学と学校の垣根を越えて、研究者と実践者が対等に机を囲む会であることを感じた。2日間を終えてそれぞれに刺激を受けて活気に満ちた顔に出会うと、この会を行って本当に良かったという嬉しさと、ここから実践も研究も変えていける何かが生じる期待を感じた。運営上至らないところが多々あったことはこの場を借りて御詫びしつつ、様々な立場の先生方の今後のご参加、ご協力をお願いしたい。



## わたしの1年とラウンドテーブル2008

松田 淑子（福井大学）

横須賀薫氏、新田正樹氏、松木健一氏のご報告により、教職大学院の背景や全貌を俯瞰することのできたシンポジウムを皮切りに『ラウンドテーブル2008』がスタートした。

Session I Zone A 教職大学院のスタッフの力量形成 Zone Aには、大学関係者が集まり、5つのグループに分かれ、1グループ10名程度で『教職大学院のスタッフの力量形成』について話し合った。福井大学スタッフの一人として、事前に報告することが決まっていた私は、報告内容を考えるに当たって、自分自身とスタッフ全体の1年を振り返り、どのようなことを経験し、何を学び、どのような成長ができたのかを整理し考察した。つまり、自分自身とスタッフ全体の1年間の営みすべてを『教職大学院のスタッフの力量形成』のための『実践』と捉え、そのプロセスを『省察』し報告したのである。

報告後に、現在教職大学院構想に取り組んでおられる他大学の先生から、「松田さんは、この1年、教職大学院にかかわる『作業』をしたのではなく、きちんとした『仕事』をされたのですね。自分たちの『実務家』に対する思い込みを改めなくてはいけないと思いました。」というとても励みとなる印象深い感想を頂いた。確かにこの1年、毎日が嵐のような日々であり、思いもよらない出来事や課題が日常的に次々と押し寄せてきた。まさに『生みの苦しみ』であった。しかし常に目指すところはぶれることなく、スタッフ間で助け合いワクワクしながら一緒に乗り越えてきた。ご指摘の通り、『作業としてこなした』ことはほとんど無く、自分自身の志に基づいた『仕事』として取り組んできたのである。

また、このグループには、約20年にわたり福井大学で教育改革に取り組んでこられた元々のメンバーの一人である松木先生も同席していた。あとで松木先生は、私の報告について、「嬉しくて涙が出そうだったよ。」と言って下さった。実は、新メンバーの私が、ほとんど無我夢中で突っ走ってきたその過程を通して、結果的に教職大学院スタッフとしての力量形成の第1番目にあげたポイントは『スタッフの同僚性の構築』であった。おそらく、逆に、長年かけて基礎を積み上げてきた先生方にとっては、沢山の新メンバーが一挙に入り、大所帯となったスタッフが『同僚性』を構築できるか、『コミュニティ』を創設できるか…これこそが年度当初からの大きな課題であったのだろう。その課題に対し、新メンバーの出した答えが一致したこの1年の歩みは、私たち福井大学教職大学院スタッフの宝なのである。

Session V・VII 展開を語る・プロセスを開き取る

2日目は、小グループに分かれ、1日かけて、2つの実践の展開をじっくり聞き合った。私のグループには、やはりこの4月から教職大学院を開設する他大学の実務家の先生、他大学の現職院生である先生、4月から福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学

院）スクールリーダー養成コースの院生となる附属の先生、同じく教職専門性開発コースの院生となる臨任の先生、学部の1年生、といった多彩なメンバーが集まった。私は、ラウンドテーブルの経験を重ねるにつれ、本質というものは、異質だからこそ見出されやすく、迫りやすいのではないかと思うようになった。このグループの話し合いでもまた、実践の根底にある本質的な部分に自然と焦点が定まり、それぞれの立場から意見を言い合い、深め合うことができた。後日、ご報告頂いた初参加の現職の先生から、「『こんな研究会今までなかった…。』そして、福井大学の先生方の、教師教育、教員養成にける本当に『熱い』想いを感じました。やはり、真摯に、誠実に“教師”をしてきた人間にとっては『今、何かせねば…。』という想いがあるのだと共感しました。」という嬉しいメールを頂いた。

また、他のグループにいた福井大学現職院生のA先生からは、「（同じテーブルの報告者であった）B先生の報告にもすごく刺激を受けました。私は今、ラウンドテーブルの渦の中に呑み込まれてぐるぐる回っています。私もB先生のような授業がしたい！私もラウンドテーブルで報告できるような実践がしたい！」という感想を伺うことができた。その後、人づてにはあるが、B先生もまた「大変充実したラウンドテーブルだった。」とご満足されていたことを聞き、「語り手」と「聴き手」の相互作用によるコミュニケー

**実践し  
省察する  
コミュニティ**  
Communities of Practice and Reflection

Fukui Round Table  
Spring Sessions 2008  
For Reflective Practice,  
Organizational Learning,  
and Reflective Institutions

知識基盤社会に生きる力を培う教育と教職大学院の課題  
日本の教職教育改革のための福井会議2008  
3/1 (sat) 13:30-19:30  
福井大学総合研究棟 113階 会議室

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008  
3/2 (sun) 9:00-14:40  
福井大学教育地域科学部 第1号館

探究する学びを実現する教師  
教師を支える教職大学院  
教職の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク

**2008.3.1-2**  
福井大学大学院教育学研究科  
教職開発専攻/教職大学院  
(2008.04 開設予定)

※1次参加費 2008.1.21 (月)17:00-18:00に実施されます



ションの深まりという、SessionIVで柳澤昌一先生がお話されたことの意味を改めて実感することができた。ラウンドテーブルにはいつも、まさに「袖振り合うも多少の縁」という出会いがあり、立場も年齢も専門も異なる、ほとんど初対面の者同士が語り合う中で、濃密な議論や共感がわき起こる。このような時間を持つことが、一人の教員にとっても、明日の授業にとっても、これからの学校にとっても、一番の肥やしになるのではないだろうか。

おわりに 思えば、初参加即初司会で、『ただその場にいるのがやっと』だった1年前のラウンドテーブル。『一参加者』という感じだった2007年6月のラウンドテーブル。そして、実行委員に加わり、計画段階から携わって初めて『創り出した』という自覚がもてたこの3回目のラウンドテーブル。私自身にとって、大きな節目となるラウンドテーブルであった。

私は、教育とは、その社会の、そして一人ひとりの『未来』を創る営みだと思っている。だから、色々な方にこのラウンドテーブルに参加してもらおうということは、福井大学が発する「いっしょに教育をよくしていこうよ！このとっても困難な時代に、自分たちの未来を切り拓いて、確かなものにしていこうよ！」という誘いに乗ってもらおうことであり、このうねりの中に入れてもらうこと、同志になってもらうことなのだと思う。そして、現職の先生が教職大学院に入学されること、拠点校に名乗りをあげてもらおうことなどもすべて同じ意味なのではないかと思う。

ご参加頂いた皆さんのお蔭で、『ラウンドテーブル2008』は、激動の1年の最後を締めくくり、かつ教職大学院の門出にふさわしい大変いい節目の会となりました。本当にありがとうございました。

…さあ、遂にスタートです！

## めざすべき方向を確かめる

長谷川 義治 (福井大学)

はじめに 福井大学総合研究棟Ⅰの会議室でラウンドテーブルの受付をしながら、私は、ちょうど1年前、ラウンドテーブル2007に初めて参加し、福井大学が教職大学院の設置に向けて取り組んでいること、全国の教職大学院設置予定大学の教員を集めてラウンドテーブルを開催していることに、感動・感激したことを懐かしく思い出していました。

それから1年。福井大学教職大学院の実務家教員として、大学の研究者と一緒に教職大学院の開設準備を着実に進めながら、県教育委員会等とのつなぎ役も担ってきました。

教師教育 第1日目は「日本の教師教育改革のための福井会議2008」です。セッションⅠは、シンポジウム「教職大学院の創出 その構想と展望」で、前宮城教育大学長の横須賀薫氏、文部科学省の新田正樹氏、本学の松木健一氏の3人から、教員養成の現状・課題や教職大学院が目指すものなどを説明していただきました。特に、私にとっては、教職大学院は、研究者養成の大学院とは異なり、実践的指導力を備えた人材養成を目指す専門職大学院であり、そこでは、教育実践の経験を省察し、経験知として体系化して伝えることができる教師教育を目指していることなど、かなり整理した形で理解する機会になりました。

セッションⅢは、「教師の協働的な力量形成を支える」をテーマにしたワークショップで、私が参加したグループでは、長野県伊那小学校の「総合学習・総合活動の取組」、富山県堀川小学校の「授業公開の日常化の取

組」、福井県至民中学校の「授業研究を中心にした協働研究の取組」の発表がありました。教員の資質向上を目指した実践報告で、しかも、いずれの発表も、授業づくり・授業改革が中心テーマであったことに、改めて、勇気付けられる思いがしました。

実践を語る 第2日目は「学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008」です。セッションⅤ・Ⅶは、「展開を語る／プロセスを聞き取る」をテーマに、小グループに分かれて実践の展開を聞き合いました。私が参加したグループでは、福井大学附属中学校の「探究型保健学習」、長野県伊那小学校の「総合活動の実践事例」の発表がありました。前者については、子供たちの学びをナラティブに記録してあり、授業参観していない場合の事例研究であっても、授業の展開が生き生きとイメージでき、記録化する意義を体感することができました。後者については、伊那小学校では総合学習・総合活動を軸にして各教科の学習を展開し、しかも、学力調査の結果は県平均を上回っているというのを聞き、大変驚きました。

おわりに ラウンドテーブル2008に参加された宇都宮大学の松本敏氏との御縁で、3月中旬、宇都宮大学開催の「大学との連携による学校活性化フォーラム」に参加し、栃木県の公立小中学校で展開している実践を聞く機会を得ました。「生徒指導で苦勞して中学校が、授業改革に取り組んだら、生徒が落ち着いてきた。」という話を伺い、教職大学院が目指すべき方向を改めて強く意識しました。

# 世代のサイクルを実感

石井 恭子 (福井大学)

Session III ZoneBは、堀川小の校内研究の話で始まった。教師の壁面いっぱい貼られた大きな紙には、1年生の子どもの学びの軌跡が書かれている。校内の研究グループ9名で1つの学級の子どもたちの詳細な記録をとり、一人の子どもの学びを何カ月もかけて検討していくという。「個人戦と団体戦がある」「堀川小は野武士集団」という言葉から、堀川の伝統を受け継いでいく重みが伝わってくる。伊那小の先生からは、歴代の校長が同校のOBであること、研究の母体が学年であり、恒常的に行なわれることなど、長年の研究体制を継続している堀川小と似ている点が多く指摘された。授業記録をもとに真剣勝負で議論する教師同士の学び合いと厳しさについても共通している。

その後の質問や議論の中からは「授業力のある先生が、あなたの授業はだめだ、といっても若い先生は育たない」「教師が育たないと子どもは育たない」「授業記録で詳細を事実で語ることがポイント」「子どもに学ぶ姿勢、事実で語るときは若い人もベテランも同等。いかに知ったかぶりで言わないかに早く気づくか」などのことばがずっしりと心に残った。

Session V, 6年の社会科での授業づくりの話では、教室の中を想像しながら聞いていたら1時間があつと

いう間だった。子どもの姿を語る中に、グループをどう作るか、なぜ画用紙なのか、掲示のボードの意味など、先生の思いが伝わってくる。資料を配るか配らないか、話し合うか活動させるか、教師が悩み子どもを見つめ決定していく。こうした授業のプロセスを聞くとき、自分の実践や経験に引き寄せて聞いているのに気づく。

一方、一言も発せず黙ってすべてを吸収しようと一生懸命聞いている臨任の先生。「何か聞きたいことは?」と尋ねると「先生の発問は、とても重要だと思いますが、どのようなポイントがあるのですか?」と質問した。聞かれたベテランの先生は「ええ?急に言われてもなあ、意識してなかったなあ」と言いながら、自分の実践記録をめくりだす。みんなで見ながら「最後まで言わないで問いかけてるね」「途中で止めて子どもにしゃべらせるのでは?」など話し合った。自分の記録を見ながら「わいわい言うクラスがいい。突っ込み合うのがいい」など、自分の暗黙知を表現し、意味づけ、若い臨任の先生に伝えようとすベテランの先生。ここに、「世代サイクルの継承」の姿を見た気がした。

## 3/1 (sat) 13:30-

### 知識基盤社会に生きる力を培う教育と 教職大学院の課題

日本の教師教育改革のための福井会議 2008  
福井大学総合研究棟 13 階 会議室  
福井大学教育地域科学部 第1号館

---

**Session I 13:40-15:00**  
**シンポジウム/教職大学院の創出 その構想と展開**

福井大学総合研究棟 13 階 会議室  
横須賀 薫 (前宮城教育大学学長)  
新田 正樹 (文部科学省生涯学習政策局)  
松本 健一 (福井大学)

教職大学院の創出にあたって、新しい教師教育の構築が望まれる。期待されている役割・使命に照らして、制度の創出と設計にそれぞれの立場から深く関わっていった。我が国報告・意見をいただきます。

---

**Session II 15:10-15:40**  
**特別報告/韓国における科学教育改革と教師教育の課題**

福井大学総合研究棟 13 階 会議室  
Junehee Yoo (ソウル大学)

科学的リテラシーの育成を促す科学教育改革の課題。そしてそのために求められる教師教育のあり方について、韓国における取り組みを報告させていただきます。

---

**Session III 15:50-18:00**  
**二つのワークショップ: 教師の協働的な力量形成を支える**

福井大学教育地域科学部 第1号館 11/12/13/14 講義室  
Zone A: 教職大学院のスタッフの力量形成 教職専門性形成を支える協働研究 教職大学院創出にあたって準備を行ってきた期間で学んだことや、これから力量形成の必要性を感じている課題について、本グループに分かれて各グループ 本学で実践を自分の経験や問題意識を共有し、議論していきます。

Zone B: 中学校における協働研究 その展開と課題を問い直す  
中学校において授業づくり・学校づくりのための協働研究をどのように進めていけばいいのか、一人ひとりの経験や問題意識を共有し、協働研究の課題をどう支えていけばいいのか、長期にわたる協働研究が協働を促す学校の現場から学びたいと思います。

---

**Session IV 18:20-19:30**  
**実践し省察するコミュニティを培う: その試行経験を語り合う**

福井大学アザガローナ  
新しい大学院づくりの途中でも直面している実践的課題、乗り越えてはならない課題、当事者としての経験や問題意識を共有したいと思えます。



## 3/2 (sun) 8:50-14:40

### 学校改革実践研究 福井ラウンドテーブル 2008

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る  
福井大学教育地域科学部 第1号館  
第11/12/13/14 講義室

地域や現場で自分たちの実践をじっくり語り、その実態をふまえて課題を議論していく。経験・勘察を大人同士が異議を述べて学び合う活動体 (コミュニティ) に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を磨いていく。そうした態度や取り組みが少しずつ蓄積されてきています。試行錯誤を重ねながら大切に思われているような取り組みを、より広く伝えたい。じっくりの展開を聞き取り、学び合う場を創りたいと思えます。

---

はじめに: 会の進め方について  
8:50-9:00 第11/12/13/14 講義室

---

**session V 展開を語る/プロセスを聞き取る part1**  
9:00-11:20 第11/12/13/14 講義室

(小グループで実際の展開を聴き合います)  
実践記録を止めに実際の多岐にわたる話をしていきます。心に響いている場面、言葉、表情、行爲、その場々に感じていること、ふりかえりの中で見えてきたつながり、話し合いと実践づくりの中で感じてきたこと、いま改めて振り返りながら考えていること、等々を無理に言葉にする。実際の展開を多岐にわたるプロセスを共有したいと思えます。実践の進展をじっくり語り、想いを共有して、実際の展開でできる限り共有しあいたいと思えます。その後の実践への問いの深まりを支える役割のあり方を探りたいと思えます。

9:00-9:30 自己紹介 / 9:30-11:20 報告  
**学習されている方へ**  
学習の学校: 福井小・小笠原小・福井小・小笠原小・福井小・小笠原小・福井小・小笠原小・福井小・小笠原小  
福井大学教育地域科学部 第1号館 11/12/13/14 講義室

---

**session VI 実践を語ること・書き表すことの意味/省察の実践のために**  
12:00-12:15 1号館2階 大2講義室

---

**session VII 展開を語る/プロセスを聞き取る part2**  
12:20-14:40 第11/12/13/14 講義室

12:20-14:10 報告 2 午前に引き続き小グループで実際の展開を聞き合います。  
14:10-14:40 結び 二つの報告を聴いてそれぞれが考えたことを伝え合ったり語り合ったり。  
(小グループごとに限らなく、14:40を越えないようにお願いします)

2008.2.26 ver.02

実践の省察・再構成を通して  
活動の組織を専門性形成のための  
学び合う共同体に変えるために

### 省察的な実践を生み出す 学び合う組織を編む

For Reflective Practitioner,  
Professional Development,  
and Organizational Learning.

## 実践研究・福井ラウンドテーブル

2001.11.10-11

### 福井大学地域科学部

地域や職場の実践の場で、自分たちの実践をじっくり問い返し、その省察をふまえて実践を編み直していく。そのことを通して、地域や職場を、大人同士が語り合い学び合う共同体に変えていく。

その中で一人一人が、省察的な実践者としての力量を培っていく。

そうした地道な取り組みが、少しずつ蓄積されてきています。そうした取り組みを互いに紹介しあい、じっくりその展開を聞き、学び合う場をどのように編んできているのかに光りを当てたいと思います。

福井では、福井大学公開講座として、「フォーラム・暮らしと学びを問い返す」という取り組みを続けてきました。また社会教育実践研究フォーラムでは、実践記録を読み合うことを通して、実践研究を深め、実践的な力を培っていく条件を探ってきました。このカンファレンスはこうした取り組みに基づいています。

このラウンドテーブルは福井大学公開講座の一環として開催されます。

### 実践研究福井ラウンドテーブル実行委員会/ 福井大学公開講座現職のための実践講座 approach 1

福井新聞社提供「教職大学院 課題探る」2008. 3. 2

### 教職大学院 課題探る

福井大 シンポに1期生ら130人



教職大学院の課題などを探ったシンポジウム＝1日、福井市の福井大文京キャンパス

教育現場で中核を担う中堅教員や実践的な指導力を備えた新人教員を養成するため、福井大などが四月に開設する「教職大学院」など教育改革を考えるシンポジウムが一日、福井市の同大文京キャンパスで始まった。県内外の教員や同大教職大学院（教職開発専攻）の第一期生ら約百三十人が、今後の課題などを探った。

二日間の日程で、初日は「知識基盤社会に生きる力を培う教育と教職大学院の課題」がテーマ。中教審の専門職大学院ワーキンググループで主査を務めた前宮城教育大学長、横須賀薫氏、教職大学院の制度設計に携わった文部科学省生涯学習政策局の新田正樹氏、福井大教育地域科学部教授の新田氏は、既存の修士課程と教職大学院との違いや実践の指導力とは何かを明確にしていなければならないと指摘。横須賀氏は「大学ではなく、学校現場の中で生き残っていける大学院にしなければならぬ」と話した。

この後、参加者の大学教員は「スタッフの力量形成」、小中高校の現職教員は「学校における協働研究」をテーマに、小グループに分かれ事例発表や意見交換を実施。二日も引き続きグループ討議を行う。



日本海みち





## 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions

### Zone A 学校

#### 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり

#### 福井ラウンドテーブルに参加して

～子どもたちと教師が共に学び合うコミュニティを育むには～

福井市安居中学校 加藤 学

6月のラウンドテーブルは、学校現場としては非常に多忙な時期と重なり、参加することを迷うことが多い。しかし、毎回なんだかんだと言いながらもいつのまにか二日連日で参加することになっている。これは、ラウンドテーブルに参加することによって熱意ある多くの実践者と出会い、次の実践へのエネルギーを戴くことができるからであろう。今回も例にもれることなく多くの学びある2日間となった。

Session I のポスターセッションでは、東京都板橋区の赤塚第二中学校の発表を拝見した。今回の発表では、赤塚第二中学校というコミュニティの中で育まれている学校文化を、若手の先生方が語っている姿に感銘を受けた。教科センター方式の学校を立ち上げるにあたり核となる先生が中心となって創りあげたシステムや研究体制が、教師集団全体に広がり受け継がれていこうとしていると感じ、発表を聞きながら羨ましく思った。私が勤務する安居中学校でも負けずに学校文化を教師集団の中に根付かせていきたいと感じた。

Session II では、「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」をサブテーマに福井市豊小学校の発表、奈良女子大附属中等教育学校、そして安居中学校の実践の報告を聞いた。どの報告からも感じたことは、「ラウンド型の学び」が多くの学校現場で創意工夫されながら実践され、広がりを見せていることである。そして、これらの取り組みの先には、教師自身が学び合いながら集会的な知性を育てていく「専門職としての教師集団」があるように感じた。いくつもの課題が次々と生まれてくる現代社会では、子ども達とともに学び協働していくコミュニティによって変革に対応していくことが不可欠になってきている。今回報告された学校では、新しい挑戦を行っているがそこに

所属している教師集団は多くの課題を抱えながらも、どこか楽しみながらそれらの問題に立ち向かっているように感じた。多くの学校現場で今回の報告のような実践が生まれていくことで、学校はより豊かな学びを育む場になるのではないかと感じた。

続く、session III でもsession II での報告の熱気を引き継ぎ、小グループで実践を語り合った。グループ内では「ラウンド型の学びではその効果を高めていくためには、グルーピングが非常に重要である」ということが話題に上がった。ラウンド型の学びをコーディネートするためには、「know-who（誰が何を知っているのか）」ということを理解し、意図的に人と人を出会わせることが重要である。誰と誰が出会うことにより新たな学びが生み出されるのかを想像しグルーピングを行うことで、不確定要素の多いラウンド型の学びをコーディネートしていくことが可能になる。知識社会の学校では、このような学びをコーディネートしていく力が求められていくことを再確認した。

余談ではあるが、Session I では、安居中学校での実践を生徒が自らポスターセッションで発表を行った。生徒が大人の会議であるラウンドテーブルで発表をするという取り組みは、ちょうど1年前のSummer Sessionから継続して行っている取り組みである。当初は、「生徒たちに学校内では体験できない経験を積ませたい」という思いや、「安居中学校で生徒たちが育っていることを実際に生徒を見ていただくことで紹介したい」という考えがあつての参加であった。しかし、回を重ねていくうちに、「子どもたちの学び合うコミュニティを育む」という意味合いが強くなっていった。今回ポスターセッションに臨むにあたり、子どもたちは既にラウンドテーブルを経験したことのあ



る上級生と初めて参加する下級生と一緒にチームを組み発表の準備を行っていった。この準備の中で、子どもたちは安居中学校での実践をふり返り自分の言葉で話れるように、実践をもう一度意味づけ価値づけしていった。また、上級生とか下級生と一緒にチームを組み発表の準備に取り組むことで、開校当時の様々な重要なエピソードを物語として下級生へと語り伝えることができていく。こういった営みを通して、子どもたちは学び合うコミュニティを学校の中に築いていくのだ。

そして、今回は、そういった子どもたちの取り組みに多くの教職員が関わり、子どもたちの発表を支えることができた。ラウンドテーブルへの参加は、今までは生徒会の活動の一環としか位置づけられていなかったことを考えると多くの教職員が子どもたちの活動に携わったことは、安居中学校にとって大きな一歩であったと言える。ラウンドテーブルの存在は、安居中学校の生徒と教師が共に学び合い成長していくために、今や欠かせないものとなった。

## 教師の力をどのように高め合っていくのか

福井県立若狭高等学校 渡邊 久暢

「若狭高校で育てたいとお考えの『学力』はどのようなものですか？」

この質問をくださったのは安居中学校の中学3年生。ZoneA学校～子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ～における若狭高校のポスター発表に対して頂いた質問である。

この質問は培いたい「学力」を学校として指定していることが前提となっている。「教員個人がそれぞれ持っている学力観ではなく、学校としてどのような学力を育てたいと考えているのか」、それを問われていたのだ。さらに問われていたのは「この学力観が生徒と共有できているのか」ということだろう。「中学生や高校生にわかる形で学校が培いたい学力を示し、それが生徒に理解されているのか」、こう問われているとも感じた。

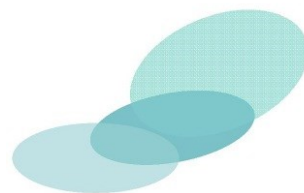
もちろん「学校としてどのように学力を培っていくのか。」についても併せて考えていくことが、各学校には求められている。とはいえ、それはトップダウンで決められるものではない。生徒の実態を良く見とりつつ、その見とりを教師間で共有し、学力を高める手立てを考えていく組織作りが必要になるだろう。

Session II では、豊小学校、安居中学校、奈良女子大附属中等教育学校の3人の先生から、学校における組織作りのプロセスをお示しいただいた。安居中の高嶋先生は、「同質性の高い人々からなるグループではなく、異質な人々からなるチームで協働して問題解決に臨み、その取り組みの意味や判断の基準を多様な視点から何度も問い直すことができるかどうかが鍵だ」と述べ、異教科で協働することの意義を強調された。また、奈良女附属の鮫島先生は、「ご意見番文化の蔓延」という危機を「自分たちが主人公になって何かを変えられるかもしれないという実感を教師一人一人が持つこと」を通して乗り越えていったこと、「教師が勉強することを大事にする文化」「協働する文化」を形成することが重要であることを述べられた。

コメンテーターの千々布敏弥先生からは「子どもに必要な力をどう考えているか?」「その力をつけるための新しい授業をどう考えるか?」という問いが参加者全員に投げかけられた。冒頭に紹介した安居中学校生徒さんの問いと、千々布先生の示された問いは共通するものであったが、Session IIIにおける小グループでの意見交換を終わったとき、このような問いについて各学校で話し合うことから、学校における組織作りが始まるのではないかと感じた。

翌日に行われたラウンドテーブルにも参加したが、自分の実践を語り、他者の実践を聴くことを通して、自身の課題が浮かび上がってくることを体感できた。このような形式で自校においてそれぞれの実践をじっくり聴き合うことは、今まで一度もなかったなあ、と反省。今年度後半の研修活動に取り入れたいと考えた。

「アクティブ・ラーニング」がこれまで以上に強調されている今だからこそ、「アクティブ・ラーニングを通してどのような力を学校として育むのか。」そしてそのような力を生徒に育むために「教師の力をどのように高め合っていくのか。」今回の2015サマーセッションでは重要な問いと、大きな示唆を頂いた。この問いに対する自分自身、学校組織としての最適解をこれから作り上げていきたい。



## Zone B 教師教育

### 21世紀の教師教育をイノベーションする

「チーム学校」を支える教師教育～教職大学院の成果を問う

## 伝統と革新

高知県教育センター チーフ 武市 綾香

伝統あるラウンドテーブルにポスターセッション発表で初めて参加させていただいた。2日目のみの参加となったため、ここで生じていることの表面に触れただけかもしれないが、時間を経るにつれ湧き上がり動き出してくるような感覚が続いている。

テーマは極めて今日のかつ革新的であった。参加したZoneBは、現代社会の状況や国の動向を踏まえ、教師の学習観の転換をキーワードに、学び続ける教員を支えるシステムをどう構築していくかということについて、教員の養成・採用・研修の一体化を柱に、教職大学院の在り方、「チーム学校」の在り方など、多様な角度から問題提起された。ともすれば、今だけを見たり情報をそのまま並べたりするだけですまされがちになるが、ここでは、これまでの経緯と将来を見通し、大学として諸情報を捉え直して構造化することにより、諸々の教育課題に対して明確な意味付けがなされていた。それゆえに、ポスターセッション、シンポジウム、グループ協議等の場で、多種多様な実践・研究と全国から集まった様々な人とが出会ったとき、目指すべき改革に向かう新たな実践の可能性としてつながり、思索を深めることができたのではないだろうか。

また、福井大学のあらゆる場所で、とても厚い冊子を目にした。ぎっしりと書き込まれた実践記録が綴じられたもの、10数年の研究の記録を編集し直したものなど様々であったが、どの冊子にも、たどってきた足跡を大事にすることが貫かれているように感じた。個人の積み上げも、組織としての歴史も、それらが確かな今をつくりあげ、将来を見る力を培っているのであろう。変化の激しい現在であるからこそ、このようにしっかりと立ち止まり、何が生じているのか見極め、思考し抜くことが必要だと思う。まさに「省察」である。ラウンドテーブルでは、語ることや聞くことによる省察の入り口も体験させていただいた。

「学び続ける教員には、研修という言葉よりも研究という言葉の方がしっくりくるような気がする」という言葉も心に残った。研究には主体的に問題意識をもつことや深い洞察力も求められる。それを一人ではなく、学び合う仲間、学び合う組織として行うことが学び続ける教員を支えるとともに、アクティブ・ラーニングへの転換を目指す今、とても大事であることを、ラウンドテーブルの省察を通して考えることができた。

## Zone Bに参加して

奈良女子大学教育システム研究開発センター 特任助教 盧 珠妍

6月27日(土)、28日(日)の二日間、福井大学教職大学院主催の「実践し省察するコミュニティ」というテーマを掲げた「実践研究 福井ラウンドテーブル」に、今回初めて参加することになった。

四つのZoneのうち、私はZone B「21世紀の教師教育をイノベーションする—「チーム学校」を支える教師教育～教職大学院の成果を問う～」を選び参加した。

ますます国際競争が激化していく一方で、日本の教育界ではいま、大学入試の抜本改革が中教審から答申され、また指導要領改訂の時期を目前とするなど、学校教育に大きな地殻変動が起ころうとしている。そんな中で、学校教育において教職員の力をどのように発揮していけばよいか重要なキーとなることは間違いない。

まず私の興味を引いたのは、Zone Bのサブテーマである「「チーム学校」を支える教師教育」のために、

行政、学校、教職大学院、地域が各々どのような組織をつくり、それぞれがいかにして関わりながら「オートポイエーシス」的なシステムを構築してきたのかということである。それにまつわる話は、「セッションⅢフォーラム」で聴くことができた。自分たちのグループでは、コーディネーターである福井大学教職大学院の先生をはじめ、同大学院生の現職教諭、福井大学附属小学校副校長、福井県教育庁教育総務課長、それと県外からは富山大学教職大学院教員と、様々な立場の方々とは有意義な議論を交わすことができ、その中で福井大学教職大学院が教職大学院としてどのようなシステムを目指してきたか、そしてこれから目指していくのかを聴けたのは貴重なことであった。

その有意義な経験とともに今回、私はある得難い体験をした。一つのテーブルを囲んで進行されたフォーラムの議論における「不思議な衝撃」の感覚はいまも

鮮明に覚えている。その秘密は「ラウンドテーブル」という形態に隠されているようだ。ゼミでも勉強会でも（大小や段階の違いはあっても）、異なる分野、地位、立場の人たちの囲んだ一つのテーブルは、穏やかに、それでいて熱く意見を交わし議論できる場となり、互いに正面から向き合うことができる空間・時間となる。さらに、相互に刺激し合い、支え合い、それにより関係性自体が変容していくことが実感できるのである。縦横無尽に、柔軟に融合し、自己変容を遂げる生きたシステム（＝オートポイエーシス）システ

ム）としての「福井ラウンドテーブル」は、別の言い方をすれば理論（思想）と実践が一つの有機体のごとく、自律的に動いているとも言えるのではないかと強く印象づけられた次第である。

今回、あらためて行政、学校、大学、地域の連携のあり方、特にその中でも大学の役割について、また組織をなす人々との向き合い方、つまり「他者との連携」のあり方の理論的な形態とは何かについて考えさせられた意義深い時間であった。

## 驚愕！共学！ 福井のラウンドテーブル

福井県教育庁 教育総務課長 大類 由紀子

福井大学のラウンドテーブルに初参加した理由は、福島大学からのお誘いを受けたからでした。今、福島大学では教職大学院を開設できるよう、福島県教委とともに構想を練り上げている最中です。私は、福島大学と県教委がどのような関係を結んで教職大学院を運営すれば、より教員のためになるのか、そのヒントを得たくて参加しました。しかし、参加して得られた示唆は、福島県の教育を根本から問い直す、大きなものでした。

Zone Bでは「チーム学校」を実現するための教職員一人一人の在り方や、その際の教職大学院の関わり方などが小グループで議論されました。そこで福井の学校関係者から聞いたこの言葉に度肝を抜かれたのです。

「福井では困り感のある先生をすぐに助け、救う学校文化が根付いています。昔から当たり前のように、そうでした。」

他の福井の教育関係者からも話を聞くと、ある中学校では、敢えて教科や校務分掌が異なる教職員同士5人ほどで、週に一度、1時間近く日常の取組や課題を話し合うことで、情報を交換したり解決策を提案し合ったりしているとのことでした。これにより、教科を超えてよりよい指導方法を模索したり、個々の生徒の見えなかったよい面を共有できたりするというのです。

教職員一人一人は立場や専門性に違いがあるだけでなく、得意分野にも差異があります。その前提の中で、互いに話し合い、不足している部分を埋め合わせ、ブラッシュアップすることが学校力の向上につながり、児童生徒に還元されていることがよくわかりま

した。私は、この埋め合わせ、高め合いの文化は、福井大学教職大学院の「実践カンファレンス」の伝統が各学校に普及したことによるものだと確信しました。

福島の学校現場でこのような文化が根付いている例はごくわずかであり、さっそくすぐに普及したいと思いました。学校力を高める上で、有無を言わせぬ説得力があったからです。教職大学院の創設を俟たずとも、すぐに着手できることだったからでもあります。

まずは県教委関係者から、ということで7月15日には福島大学関係者と県教委職員により、「教員の資質向上方策について」セッションを行いました。参加することで、これから自分の打つべき手がクリアになりました。さらに、あらゆる教育関係者とラウンドテーブルの場を設けられるよう、計画を立てているところで

す。福井のトップレベルの学力、体力といった成果の裏には、学校、大学（院）、行政を通じた福井の教育界全体のチーム力があることに気付いた2日間でした。特に感心したのは、こうした教育イノベーションの手法を、他県の教育関係者や私立関係者にも開くことで、福井を超えた教育の向上を視野に入れているところです。さらに言えば、多くの大学（学部）生をラウンドテーブル参画させることで長期的な教育界の発展を期していました。

福井と福島。遠くはありますが、同じ「福」つながりで、これからも多くのことを学ばせていただき、いつか恩返しできる日を目指して、日々、実践と省察を繰り返していきたいと思います。福井大学そして福井の教育関係の皆様、本当にありがとうございました。

## Zone C コミュニティ

### 学び合うコミュニティを培う

## 新たな視点、活動継続への力を得たラウンドテーブル

公益社団法人ふくい市民国際交流協会 辻端 聡子

今回初めて、実践研究福井ラウンドテーブルに参加させていただきました。シンポジウムでは、長崎外国語大学の神吉先生とともに多文化共生に関する取組について発表する得難い機会をいただいたことに深く感謝いたします。つたない内容ではありましたが、日頃業務に追われてなかなか整理することのできなかった活動内容を、発表準備のためにじっくりと振り返ることができたこと、さらに、神吉先生とお話の中で新たな気づきを得たことで、今後事業を継続していく大きな力をいただけました。

また、神吉先生のお話はどれも楽しく、楽しい中に鋭い考察があり、その中でも「人を肩書きや外見や国籍という『ラベル』で見ない」というお話がとても印象的で、私たちの日頃の活動はまさに『ラベル』で見ないということを大きな目的にしているのだと再確認しました。

当協会では、福井市の委託を受け、毎年福井市内の中学生10名を姉妹友好都市ヘジュニア大使として派遣しており、今年の3月にはジュニア大使たちとともに中国杭州市を訪れました。現地では杭州市の中学生と交流し、中国の家庭に1泊のホームステイ体験をしたジュニア大使の1人が「これまで、中国についてはマスコミから伝わる情報しか知らず、様々な社会情勢や事件、環境問題などマイナスのイメージが強かったけれど、実際に訪れたことで中国という国、学生、暮らす人々のイメージがずいぶん変わりました。これから

も情報を鵜呑みにしないで、国やそこに暮らす人々の本当の姿を理解していきたいと思います。」という感想を寄せてくれました。

中学生である彼女は、交流を通して、人を「ラベル」で見るべきではないことに気がつきました。彼女のような考えができる人が少しずつ増えていけば、神吉先生がお話になった日本人・外国人コミュニティの2分化のような危機も回避できるのではないかと、改めて草の根活動の重要性を感じました。

クロスセッションでは、子どもたちと関わる大学生3名から取組についての発表がありました。特に探求ネットワークでの取組の発表は、私たちの小学生対象の異文化理解講座と重なる部分もあるため興味深く、1年を通して子どもたちと関わり、時には課題にぶつかり、戸惑い、運営について悩み、取組をよりよいものにするために工夫する様子は、臨場感にあふれ目の前に現れてくるようでした。今年もまた2年目の取組をするそうですが、可能ならば2年目の活動を終えた彼らの話を再び聞きたいと思っています。

さまざまな実践者のお話を聞くことができた今回のラウンドテーブルですが、取り組んでいる内容は一見違うように見えても、根底に流れる思いに共通するものを見出し、1人1人の実践者たちの1歩が積み重なり、地域全体の大きな1歩につながっているのだと感じました。

## 続けるということ

福井市酒生公民館 竹嶋 純子

今回のシンポジウムは「多文化社会を支える」というテーマで、外国籍の子どもたちをサポートしている日本語指導ボランティアの現状と、外国語大学の先生から見た多文化共生のお話とのこと。今考えると大変失礼な話なのですが、アパートやマンションがひとつも無い、のどかな田園地帯の我が地区には全く関係ない話…とっていました。ところがシンポジウムが進むにつれ話に引き込まれていく自分が！まさに〈見る・省みる〉こと。これだからラウンドテーブルはやめられないのです。

昨年、ある事業をきっかけに、子どもたちが頻繁に公民館に出入りするようになりました。子どもながらに、学校では社会の一員として頑張っているのでしょう。1対1で正面からぶつかってくる子どもたちは、

公民館では解放されるのか、自由奔放にふるまっていました。顔なじみの地区の子どもたちさえ関われば関わるほど、どのように接し、どのように向き合えばいいのか悩みは尽きませんでした。ましてやそれが外国籍の子どもたちとなると、言葉の壁はもちろんその大変さは計り知れません。運営会議では、「聞いてほしい」「話したい」と、張りつめた気持ちを抱えた子どもたちからの「声」を聴き、ボランティア一人で抱え込むのではなく、全員が共有するという、ボランティア側をサポートする体制もしっかりとなされているからこそ、安心して子どもたちを見守り、支え続けていけるのだと感じました。

公民館主事になり6年目。わけがわからないながらも、一粒一粒、願いを込めて蒔いた種が、あちらこち



らから芽を出し始めました。しかし、せっかく出た芽をどう育てていくか、またどう増やしていくか。成長と共に、課題も変化していきます。評価や結果を気にして前に進めず足踏みしていた自分の胸に、今回のシンポジウムの言葉が「がつん」と響きました。ユーモアを交えながら話された神吉先生。ラベルで見ないということ、まさに今回の私です。まわりをよく見ないうちから勝手に判断してしまうのではなく、まずは現場に足を運び、見て、聞くこと。どうしたら喜んで飛びついてくるか。よく知らない人にわかりやすく伝えるためにはどうしたら良いか。ふれあいの場・息抜き場の場を設ける（居場所作り）。課題を洗い出す（話し合い・聞き合う場）。そして圧勝でなくてもいい勝ち続けること。どの言葉もすべて公民館活動の原点につながっていました。

コミュニケーション能力とは、聞き上手なことと先生はおっしゃいます。クロスセッションでファシリテーターの大役を仰せつかったものの、今回もまた、参加者のみなさんに助けられました。違った場所で活動している報告者同士が、同じような悩みにぶつかっていたり、シンポジウムでの言葉が解決のヒントになったり。どんどん話が膨らんでいくのもラウンドテーブルの面白いところです。報告者の話を引き出すどころか、足踏みしていた自分が、逆に背中を押していただいたような気がしました。

今回、多文化社会を支えるという視点から、改めて公民館を省みる機会をいただけたことと、今回の開催にご尽力いただいた皆さまに感謝いたします。

## 実践研究福井ラウンドテーブルに参加して学んだこと

目白大学大学院言語文化研究科 神定 いずみ

このたびは貴重な学びの機会をいただき、本当にありがとうございました。想像していた以上に多くの発見や気づきがあり、2日間と言う短い間に人間として少し成長できたように感じています。

はじめにラウンドテーブルで発表してみないかとお誘いをいただいたときは、本当に軽い気持ちで「面白そう」「滅多にない機会だからやってみよう」という思いだけでお受けしました。「自分の実践を共有する」ということはさほど難しいことではないように感じていたからです。しかし、発表の原稿を考える段階になり、自分の考えの甘さを痛感いたしました。全く会ったことがなく、興味のある分野も育った環境も何もかも違う方々に自分をわかってもらう、ということは、本当に言葉を尽くさなくてはいけない大変なことだとそのときはじめて気づくことになりました。

しかしながら、今思えば、そのときから私の「学び」は始まっていたように感じます。ときどきは立ち止まってこれまでの経験を振り返ることはありましたが、私には普段から日記をつけるような勤勉さはありません。自分がどのような価値観で生きてきたのか、何に興味をもち何に苦手意識を抱くのか、初めて会う方にどう伝えるべきなのか考え文字化する作業は、過去を振り返りつつも未来のことも考える良い機会になりました。

Zone Cのシンポジウムでは、私と同じ分野（日本語教育）についてお聞きすることができ、とても勉強になりました。と同時に、私にとって身近な分野がほかの参加者の方には目新しいものであることに改めて気づき、自分にとっては当然の「前提」としてある考え方が決して世間一般に通用するものではないということに再認識することができました。

クロス・セッションのメンバーはファシリテーターに公民館の方、大学生3名と私の計5人で和やかな雰囲気

に安心しましたが、いざ報告を始めるとなるとやはり緊張してしまい、4名の方々にはお聞き苦しい発表になってしまったかと思えます。それでも真摯に聞いてくださり、興味を示していただけたことは本当にありがたかったです。

ほかの方々の報告も大変興味深く聞かせていただきました。他学部・他専攻の話聞く機会もなかなかありませんが、まして他大学の、学年も違う方のお話を聞くのは初めてのことで、視野が広がると同時に、自分が生きている世界がいかに狭い世界なのかを痛感することとなりました。また、報告に対するほかの方の質問も、それぞれのバックグラウンドに根差した視点からのもので、その着眼点も大きな学びとなりました。

「学び合うコミュニティ」のタイトルの通りにほかの方の学びに繋がる報告ができたのかいささか不安は残りますが、大変貴重な体験と学びを得ることができました。

素晴らしい機会をいただき、本当にありがとうございました。

そしてこれからも多少の軌道修正をしながら「サポート至民」として息長く歩んでいきたいと思っています。

おわりに、昨年に続き参加が許された会場には飲み物も用意されていて、その気配りにホットした。第7テーブルに着くとまとめ役の熊野直彦先生の穏やかな語りで始まり緊張も和らぎ話すことが出来感謝しています。私と同じテーブルで発表された長野県上田市教育委員会、伴美佐子様の資料は実に良く構成されていました。また何時の日かテーブルを囲む機会があれば参考にしたいです。今回よりまた私たちの取り組みが充実した成果が得られように学校の先生・生徒達と共に過ごす時間を大切にしていきたいと願っています。

## Zone D 授業

### 授業改革の扉を開く

— どうしたらできるの？ アクティブラーニングを考える —

## 福井ラウンドテーブルに参加して

牛久市立ひたち野うしく小学校 本橋 和久

今回初めて参加しました。様々な背景をもつ参加者の皆さんと文字通りface to faceで交流することができ、想像以上に「柔軟で多様性に溢れた研究会」という感想です。参加者が持ち寄る話題が様々で、いずれも私にはとても新鮮に感じられました。

石井希代子先生からのレジュ・エミリアについての報告からは、日本の学校で行われているアートの教育について考え直すきっかけをいただいたと思います。そのポイントは「つくる」より「自己表現」、すなわち、どう表すか、どう見せるかを大切にすること、子どもたちが「好きなものを見つけること」を促すような環境を用意することなどです。自分の勤務校では果たして子どもの自己表現を支える「わざ」としての技法や豊かな「素材」を十分に用意しているか、校内研修の際に全職員で考えてみたい重要な課題だと思えます。

現地で研究された経験をもとに、多数の画像を交えながら興味深いお話をしてくださった石井先生に感謝申し上げます。

私自身の実践を紹介する機会もいただきました。他者に伝えるためには、これまでの取組を見つめ直し、再構成する作業が必要になります。その過程で、まだまだ自分の理解が浅いこと、見方が狭いことなどに気付きました。例えば、教科の本質に沿った授業づくりのあり方です。協同的な学びの考え方に基づく授業研究を月に1回～2回組織して実践を始める段階では、全ての教師が同じステージで協議できるように、子どもの学ぶ姿を話題にしながら、そこから我々が学んだことを交流し合うというスタイルをとってきました。しかし、授業研究が軌道に乗り、子どもの関係性だけを議論してもなかなか学びの質が高まらなくなってくると、どうしても教科の本質を深く掘り下げる必要が生まれてきます。現在の勤務校では、まさにその段階にあります。その課題を抱えながらこの研究会に来て、他の先生たちの実践から学んだのは、やはり教科の本質に迫る授業を求めているということです。協同的な学びの哲学とヴィジョンを軸としながらも、学ばせる内容をいかに洗練していくか。これが今後の課題です。

もう一つは、前述した教科の本質に迫る授業づくりをどう進めていくかです。基本は全教科領域での実践研究が必要だと思えます。これまで現在の勤務校では、国語、算数など、年度ごとに特定の教科を重点的に研



究してきた経緯がありますが、そのアプローチでは、私たちが目指している全ての教科の全ての授業の質を上げることにはつながらないこともある、ということです。もちろん、国語あるいは算数の授業を参観して学んだことは次の社会や理科などに十分適用できます。基本となる学びの作法や教師の居方などは共通しているからです。しかしそれ以上に、授業が定型化・マニュアル化することで、子どもの学びが見えなくなったり、その教科以外の授業において課題や資料の質的向上がなかなか実現しなかったりする弊害も見えてきました。そこで、今年度は算数に特化せず、個人のテーマに基づいて多様な教科で授業研究を進めようと呼びかけているところです。

第2日に同じグループになった同志社中学校の理科教諭、戸賀沢先生が紹介してくれたものの中にカラークリップの磁界可視化教材があります。本校に必要な「教科の本質に迫る教材」の具体例だと思い、早速理科支援員や事務職員を巻き込んで製作してみました。廊下を通る子どもたちに見せては「どうしてこうなるのかな？」などと彼らの反応を楽しんでいます。特に、学級担任制を基本とする小学校では、このような教材開発を協同化すると、各教師が知恵を持ち寄って楽しい教材研究ができるのではないかと。そのヒントをいただいたように思います。

福井のラウンドテーブルに参加して全ての教科の全ての授業の質を上げるためのヒントをたくさんいただきました。また機会をつくって参加していきたいです。

## Zone D に参加して

福井市至民中学校 永廣 裕子

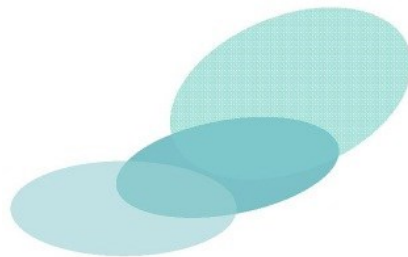
「当時は、とても楽しい内容の実験で、おもしろいと思ってやっていたのかもしれない。でも、高校の理科の授業で公式を習ったときに、“確か金属の表面積が大きくなるようにすればよかったな”と、中学校の時の実験結果を思い出し、公式を本当に理解することができた。これは、授業で先生から習うだけでなく、実際に自分たちで失敗を繰り返しながら何回も実験したおかげで、公式までの思考につながったのだと思う。また、中学校では、いろいろな意見を聞いて、それを自分でどう処理して自分の考えにしていけるかや、人とのコミュニケーションの取り方も学ぶことができた。」

これは、福井大学附属中学校に赴任して協働探究型の授業に取り組み始めた当時の生徒がその頃を振り返り語ってくれた言葉である。この時、知識を習得することだけを考えた教師主導の授業をしていたら、このようには語らなかつたであろう。

今年度、新任校で「なぜマグネシウムは二酸化炭素の中で燃えるのか。」というテーマのもと、協働で探究していく授業に挑戦した。これまでの経験や既習事項と生徒の思考が繋がらず、課題の残るものとなった。しかし、授業を終えるたびに、教卓の周りに来て、「今日の授業、楽しかった!」「何でそうなるの?分からんわあ!」という声が聞こえるようになった。また、生活ノートに理科の授業について綴ってくる生徒も増えていった。この「楽しかった!」は、ただ実験が楽しいからではない。仲間とともに考えを出し合い疑問を解決する過程において、自分の気がつかなかった考えを知ったり、自分の考えをさらに深めたりすることが楽しいのである。どの生徒も、「わかりたい」、「学びたい」と思っている。知識を習得するのも大切であるが、そこからさらに教師が一工夫し協働で学びあう探究型の授業をすることで、学びが広がったり深まったりする。さらには、将来生徒が何か

問題に直面したときに、それを解決する手がかりや術を見つけ、自分自身で乗り越えていくのに役立つ力が育めると考える。

今回、これまでの自分の授業実践を省察し、再構成したものをシンポジウムで発表したことによって、「教師として教えたいこと」、「教科としてつけたい力」と「子どもたちの問い」を一致させたり、意欲が持続するような教材を探したり、探究過程のカリキュラムを考えたり、生徒の考えを見取りそれを授業に生かしたりするには、教師のデザイン力が必要であると改めて感じた。同じ状況、同じ教室、同じ子どもはどこにもなく、授業も同じ授業は存在しない。よって私たち教師も、常にそのときその場にいる子どもに向き合いながら実践していくことが大切である。現代社会を強く生き抜く子どもを育てていることを忘れず、「今、目の前にいるこの子にとって何が必要なのか、今何をすべきか」を考えながら、今後も協働探究型の授業に挑戦していきたい。





## 2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書 ラウンドテーブルの広がりと深化

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
(教職大学院) 発行

2015年3月

福井で大学教職大学院は学校を基盤とした教師教育の実現をめざし、「学校拠点方式」による教育課程の編成を採用している。教師の専門性は個人研鑽だけで培われるものではなく、むしろ、学校の中に「専門職の学び合うコミュニティ」を構築することで育成されると考えるからである。つまり、学校改革のための大学院である。これを実現するためには、大学院授業の中心を学校に移し、学校の活動リズムに合わせて、入学者の公務分掌を支えながら組織学習を展開していくことになる。したがって、現職教員院生は休職しない。教師の専門性の高度化を今後進めるにあたっては、現職教員が休職しない大学院が必須である。休職する仕方では、国家財政が逼迫する中で、自ずと派遣数に限りがあるからである。

一方、学校を基盤とする教育課程に関しては、校内研修（もしくはOJT: On the Job Training）とどこが違うのか、といった指摘がある。本学教職大学院では、同質性の高い参加者からなる「日々の省察的実践を支えるコミュニティ」から異質性が高い参加者からなる「長期の省察的実践を支えるコミュニティ」まで、多様なコミュニティを準備する分散型コミュニティにすることで、OJTの限界を乗り越える教育課程を準備している。

ところで、学校を基盤とした教師教育を実現していくためには、1大学1都道府県にとどまっていた意味がない。また、県内外の教師・研究者・他の専門職等からなるより異質性の高い「長期の省察的実践を支えるコミュニティ」、つまり「ラウンドテーブル」を開こうと思えば、当然であるが多くの大学や教育委員会との連携協働が欠かせない。さらに、学校を基盤とした教師教育を日本に定着させるためにも、多くの大学や教育委員会との連携協働は重要となってくる。本学教職大学院では、文部科学省の平成25・26・27年度事業「グローバル社会に必要な教師教育の革新をスピーディに実現する連携事業の推進」を受け、学校を基盤とする教師教育を実

2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書  
ラウンドテーブルの広がりと深化



福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)

編集・発行

2015年3月

現するための「教師教育改革コラボレーション」を設置した。「教師教育改革コラボレーション」には教職大学院をもつ大学、教職大学院未設置大学、私学、教員養成課程をもたない大学等が参加している。なお、教職大学院の担当教員の養成を推進するために、いわゆる研究者養成の大学も「教師教育改革コラボレーション」に参加している。これは、徹底したケーススタディを中心とする専門職大学院の教員養成を行っている大学が存在しないからである。

「教師教育改革コラボレーション」がまず手掛けたのは、各地域で展開している学校を基盤とした教師教育の実践をじっくり語り聴き合う「ラウンドテーブル」を全国各地域で開催することである。本報告書は、平成26年度に開かれた「ラウンドテーブル」事例を紹介する。学校において地道で着実に進める必要のある授業改革の取組は、一方で「ラウンドテーブル」のような広範な公的空間が用意されてはじめて実現するものである。本報告を手にとられた方の「ラウンドテーブル」への参加を期待したい。(松木 健一)